

R18
ADULT ONLY
成人向け作品につき
18歳未満閲覧禁止

**転載
禁止**
Reprint is prohibited.
無断転載・複製・盗写・
Web上へのアップロード禁止

激動の昭和に
男として生まれながら
TSしてしまい、
家父長制社会を女として
生きざるを得なかった奴。



佐竹五郎

東条さんって、
普段の生活、謎
だよな……

うちの部署で
一番古株
なんじゃない？

平成元年

まあ
仕事は卒なく
こなして
くれるけど。

結婚は
してない
っぽいし。

男の影も？

うーん……
無いなあ。



まさき
いいか真咲、
お前はいずれ
この東条家を
継ぐことになる。



俺が…
東条家を…



ただいま…

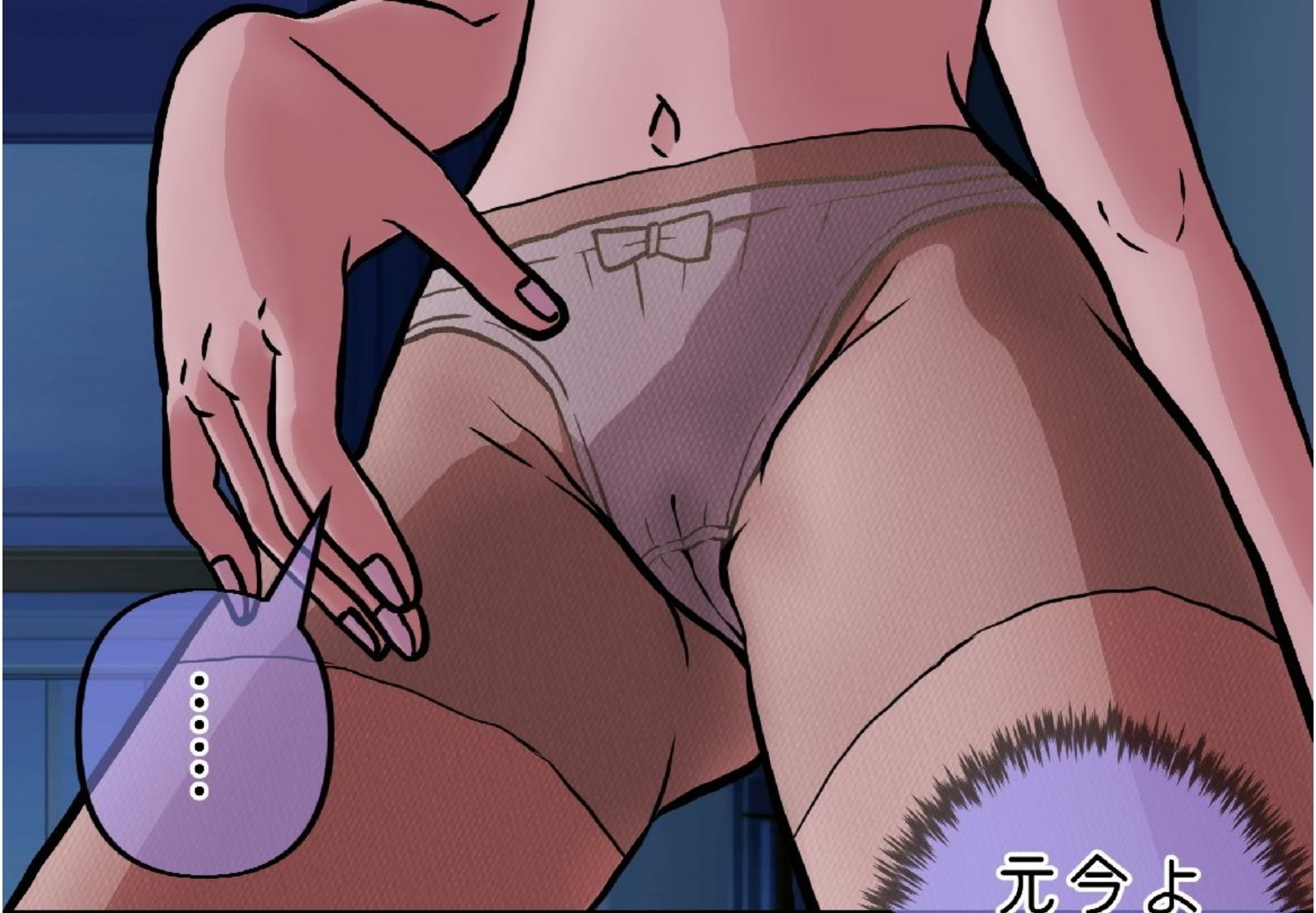
コ
ッ
ッ
ッ
ッ



お前のためなり
どんな犠牲も
厭わない。
それが男の
義務だからな。

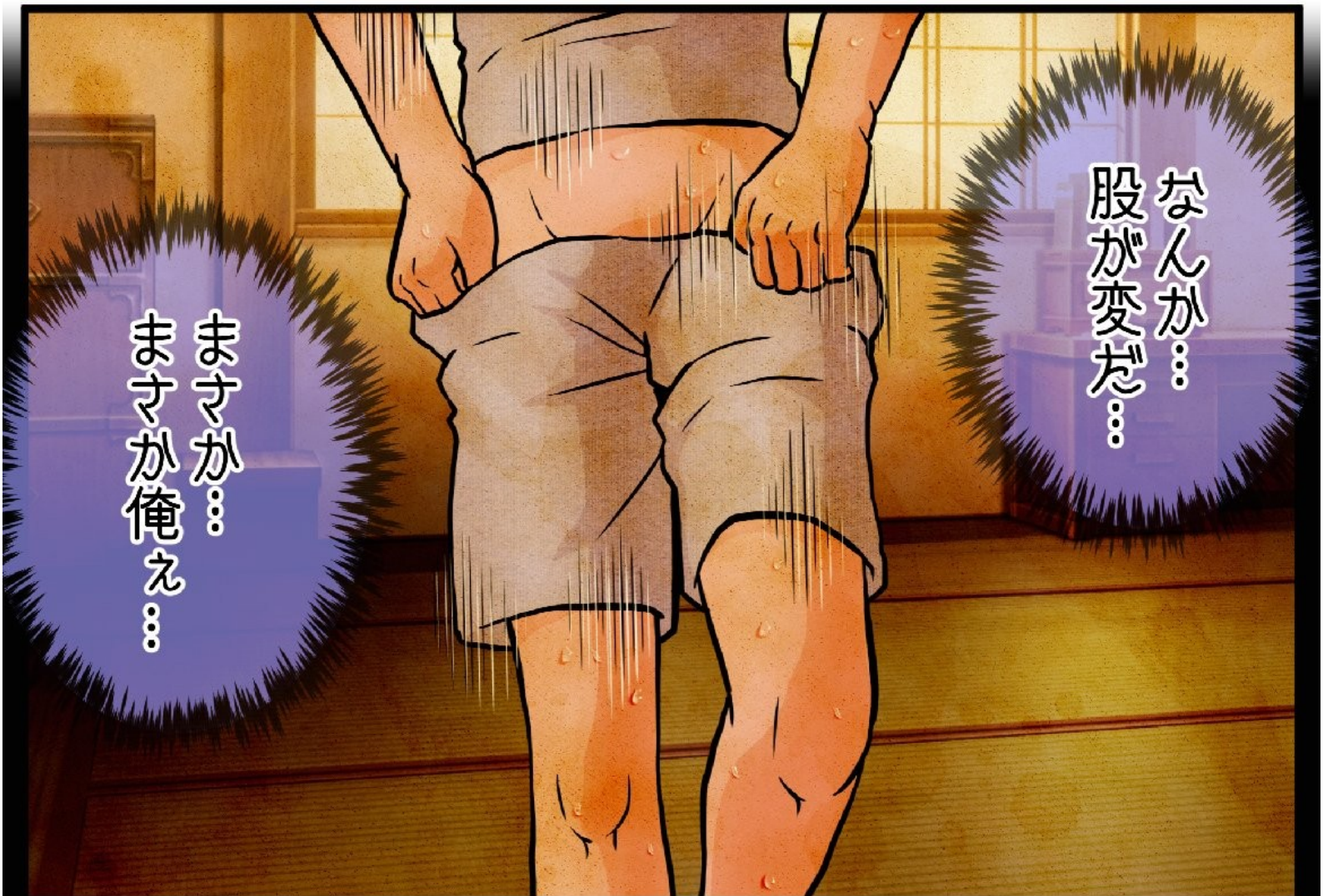
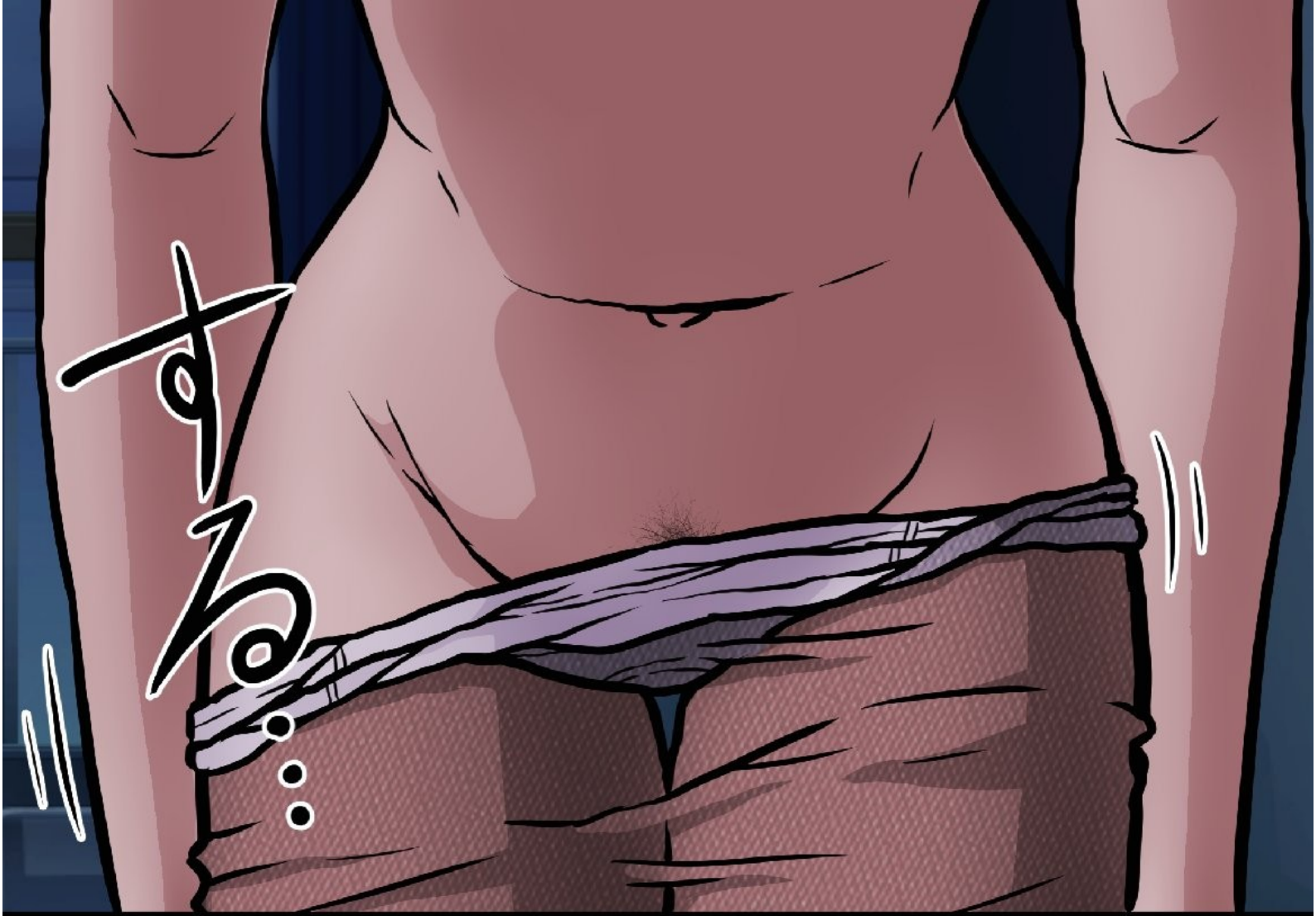


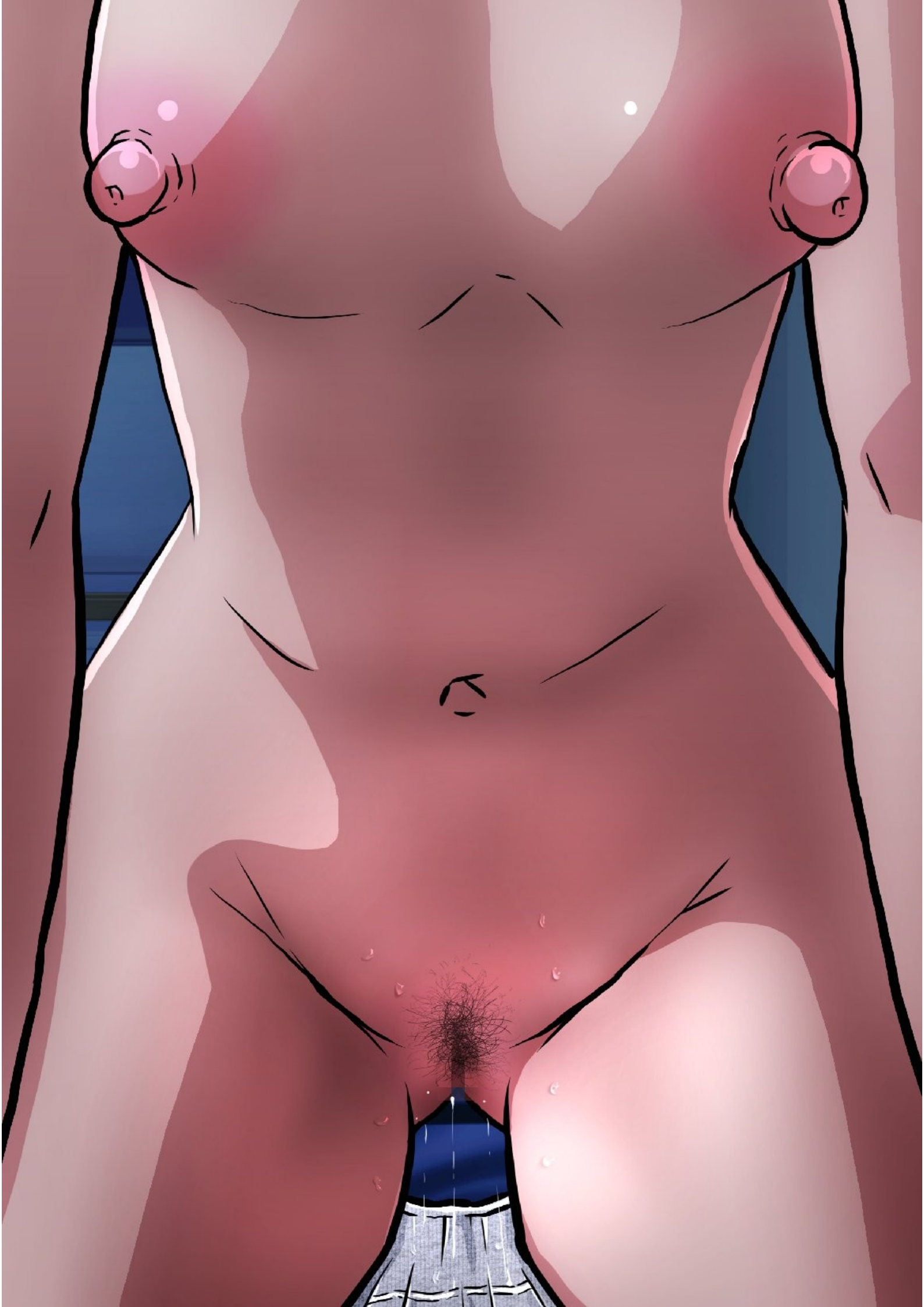
真咲ちゃん…
ありがと…



よっしゃ!
今日も
元気だ(笑)







私はかつて男だった。



真咲ちゃん、
また
喧嘩したの!?

ほっとけよ、
さくら…

ほっとけない!
私は許嫁
なんだもん!!

良い良い!!
男は粗暴な
くらいが
丁度良いのだ。

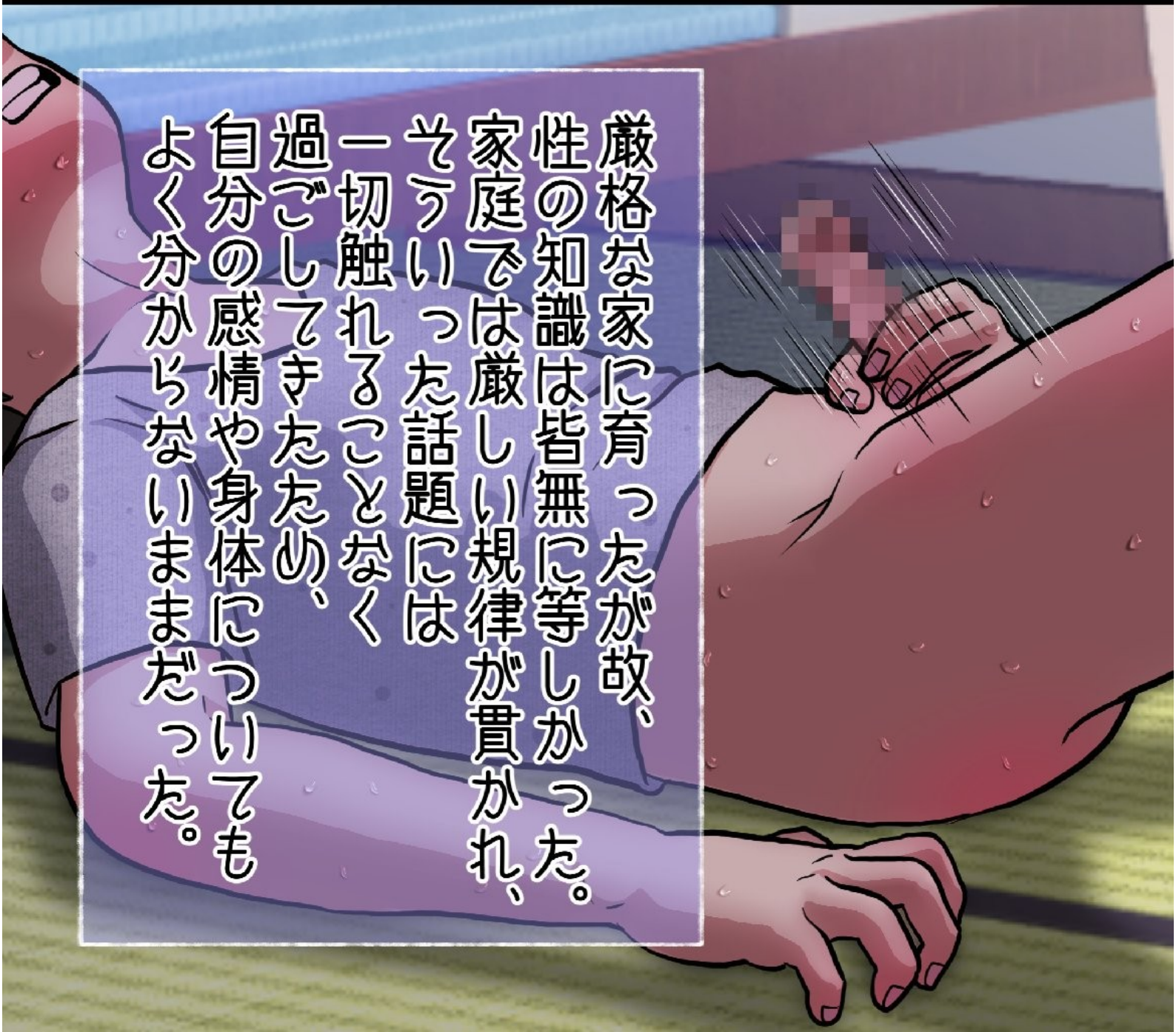
私は代々続く呪師の名家、
東条家の長男だった。
姉が一人、弟が一人いたが、
私が次期跡取り候補だった。

昭和二十五年



は……ッ
ああ……ッ

は……ッ
ああああッ!!



厳格な家に育ったが故、
性の知識は皆無に等しかった。
家庭では厳しい規律が貫かれ、
そういった話題には
一切触れることなく
過ごしてきたため、
自分の感情や身体についても
よく分からないままだった。



中途半端に身につけた
知識だけが独り歩きし、
良い歳をして射精量が
他人より少ない
ことに焦りを覚えていた。

私には男性の機能が
無いのでは？
……という
今考えると杞憂でしか
無い不安に
苛まれていた。

東条家には
「子を授かる力を
つかさどる」という
禁忌の場所があつた。
その場所は
「家長に認められた
男子のみが入れる」と
いう掟があつたが、
私は許可なく
その場所に
足を踏み入れた。
それほどまでに、
私は切実な焦燥感に
駆られていたのだ。

ここが…

私はこの場所に
入ったことを
生涯後悔
することになる。

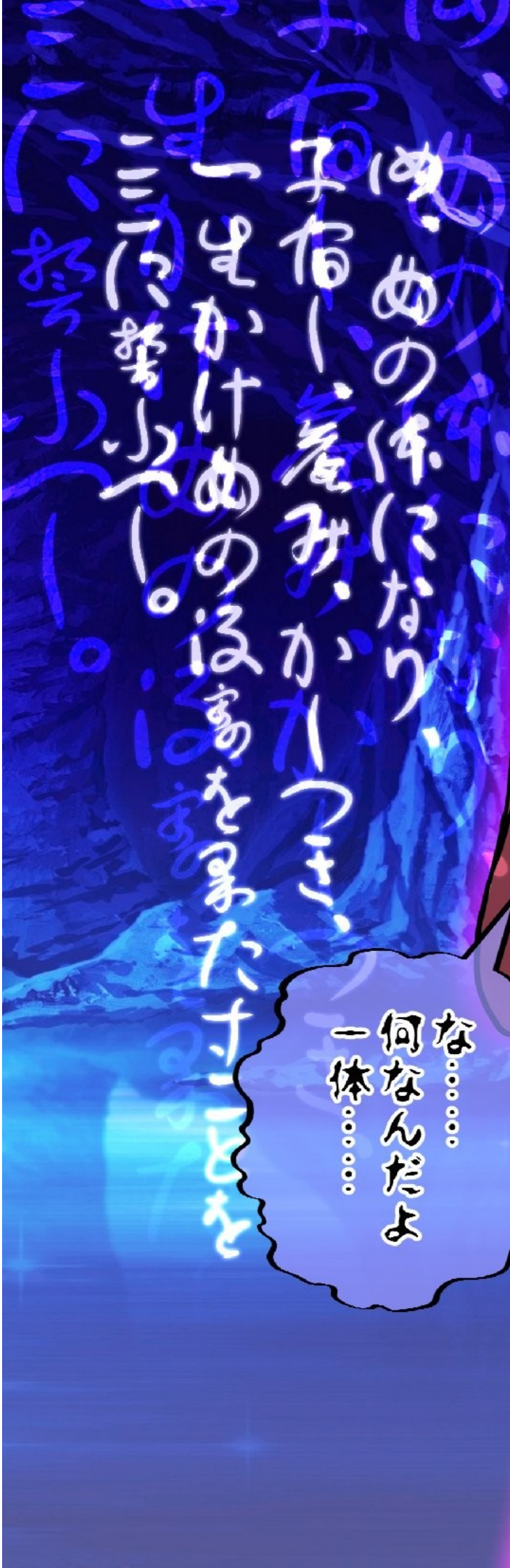


よくそまりし。
よしはせなうら
づかれり。
そ方は子を宿す力そ
れしき。よからむ。
力を授けむ。



え……？
今の……





言葉は分らないが
これだけは何故か理解した

俺の身体は、女になる。





グ
グ
グ
グ

やだ……!!
俺はこれからも
男でいたい……
女になつたら……ッ

ひ……



あ……!!
……ッ!?

リ……

キ……



だって俺…
許嫁が
いるんだよう…

結婚して
いつか二人の
子供を…



いやだあ…







その後、
気を失っていた
私は、助け出され、
家で目を覚ました。

う…噓だ…



あの場所は、
夫が妻のために
一人で祈るための場所
だったらしい。

妻が元気な子を
授かる身体に
なるように…

私は女になった。





男から女になったことで
私の生活は一変した。
昭和という時代では、性別の壁は
鉄のように固く、私は女としての
振る舞いを厳しく求められる
ようになった。親は「女らしさ」を
重んじ、家事の手伝いから
礼儀作法まで厳しく仕込まうとした。



女になったことで
今まで当たり前に
出来ていたことが
出来なくなっただ。

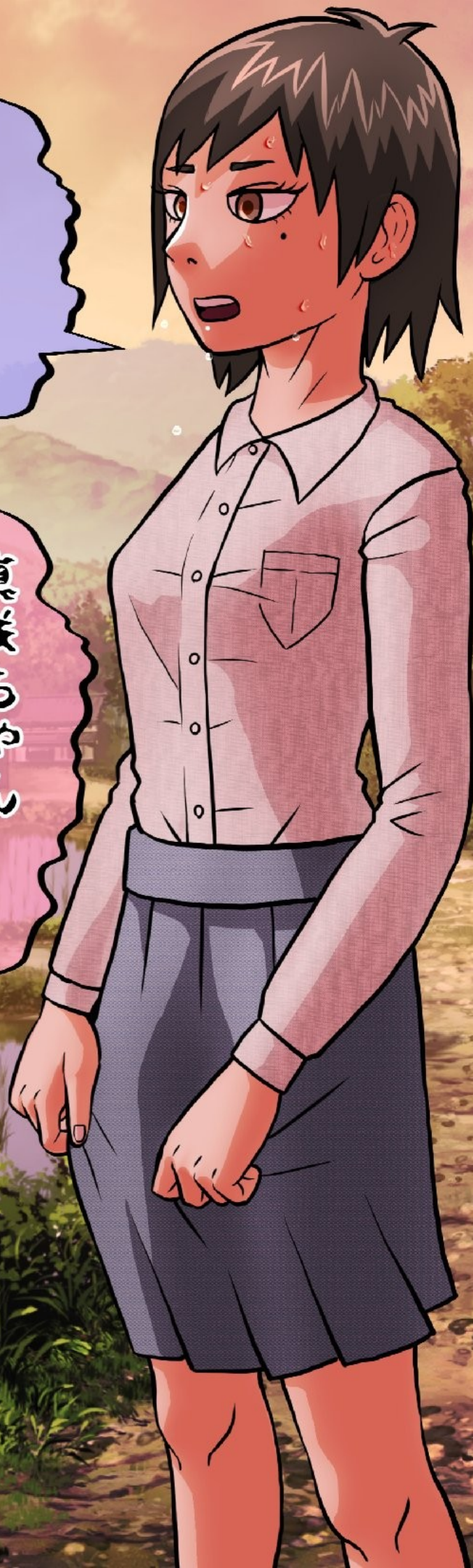
今まで
許されていたことが
許されなくなっただ。

今まで求められて
いなかったことを
求められ、
求められていたことを
求められなくなっただ

どういう
ことだよ……？

真咲ちゃん
ごめん……
女同士では
家を遺せないって
お父様が……

昭和二十九年



ちくしょう!!
何でだよ…ッ

ここに……
本当は……
あったのに…ッ

さくら
とだって……
出来たんだ…ッ!!

ぐち…

くちゅ♡

お願いします…
お願いだから…

男に…
戻して…

コラァッ!!
女はここに
近寄ってはいかん!!



女になって十四年。
私は村の役場で
働いていた。

私はこの十四年で
様々なことを
制限され、
諦めてきた。

昭和三十九年



女だてらに
仕事に励むのは
結構だけどねえ…
…その歳で
結婚してないのは
君だけだよ…

女はほら…
男のようには
いかないからさ
…ハハ…

嫁いでいないという事実。
それは、この時代と
村社会において、
異端そのものだった。
この村では、女は例外なく
嫁ぐのが当たり前だった。
それは、元許嫁のすくじり
ですら例外ではなかった。



真咲ちゃん…
アナタを裏切って
おきながら…
こんな事頼めた
義理じゃないのは
分かってる
けれど…

弟君に
「あの場所」で
御祈禱を
頼めないかな…

お医者様が…
私の身体は…
産めない女は
要らないって
私の夫が…

兄さん。
勘違いをされて
いませんか？
戸籍上はアナタが
長男だとしても、
事実上、長男は
私です。
兄さんは事実上、
ただの「次女」だ。

さくらさんも
もはや
東条家とは
何の関係も
ありません。

彼女は
庶民の家に嫁いだ。
そんな人の為に
働くほど私は
安くありません。



もう私の
やるべきことは
決まっていた。
家に…村に居られなく
なったとしても…

東条家の
男として…
やるべき
ことが…



よくそえられー
東条家の女男よ
そ方の尻ひを
やき入れ
そ方の里ひに
子を成す力を
授けむ



その後、さくりにだけ居場所を伝え、
私は村を去った。
数年後、さくりから
元気な男の子が生まれたと連絡があつた。
その子が家を出るまでは、
写真も送って貰っていたのだが、
その写真は私を驚かせた。
なぜなら…





かあさん…!!
何勝手に
撮ってるん
だよ…!!

いいじゃない。
手紙に
添えようと
思ってたね。

手紙?
誰に…?



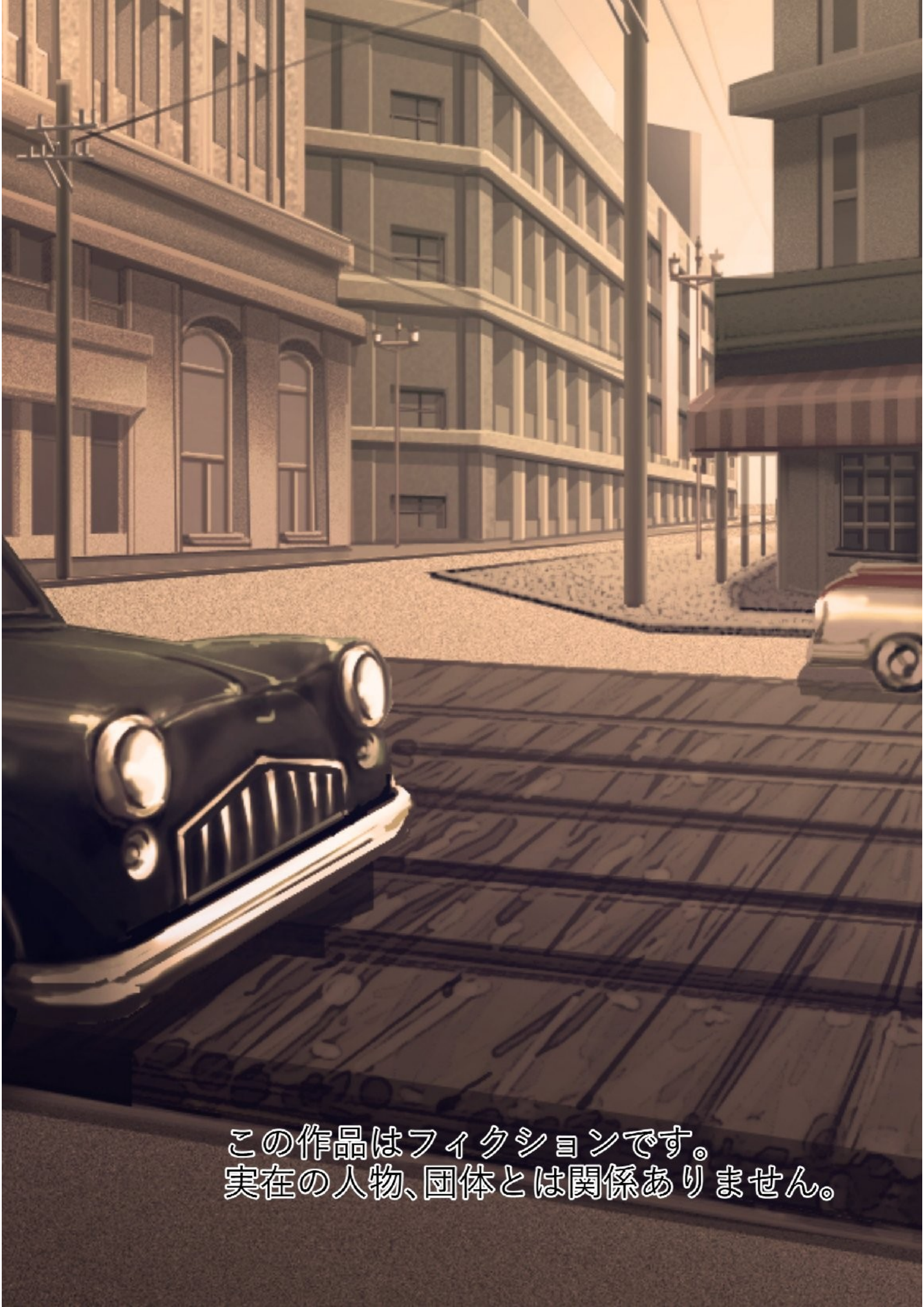
お母さんの
大切な人よ。

あの子の顔を一目見て、
あれは私たちの子供なのだと
確信した。

あの子は、私が
男だったことの
証なのだ。



本書における男尊女卑や家父長制の描写は、
あくまで旧時代のステレオタイプな
価値観を演出するために誇張したものです。
歴史的にこのような価値観が一般的であった
ことを示すものではなく、また現代では
絶対に容認されるべきではありません。



この作品はフィクションです。
実在の人物、団体とは関係ありません。